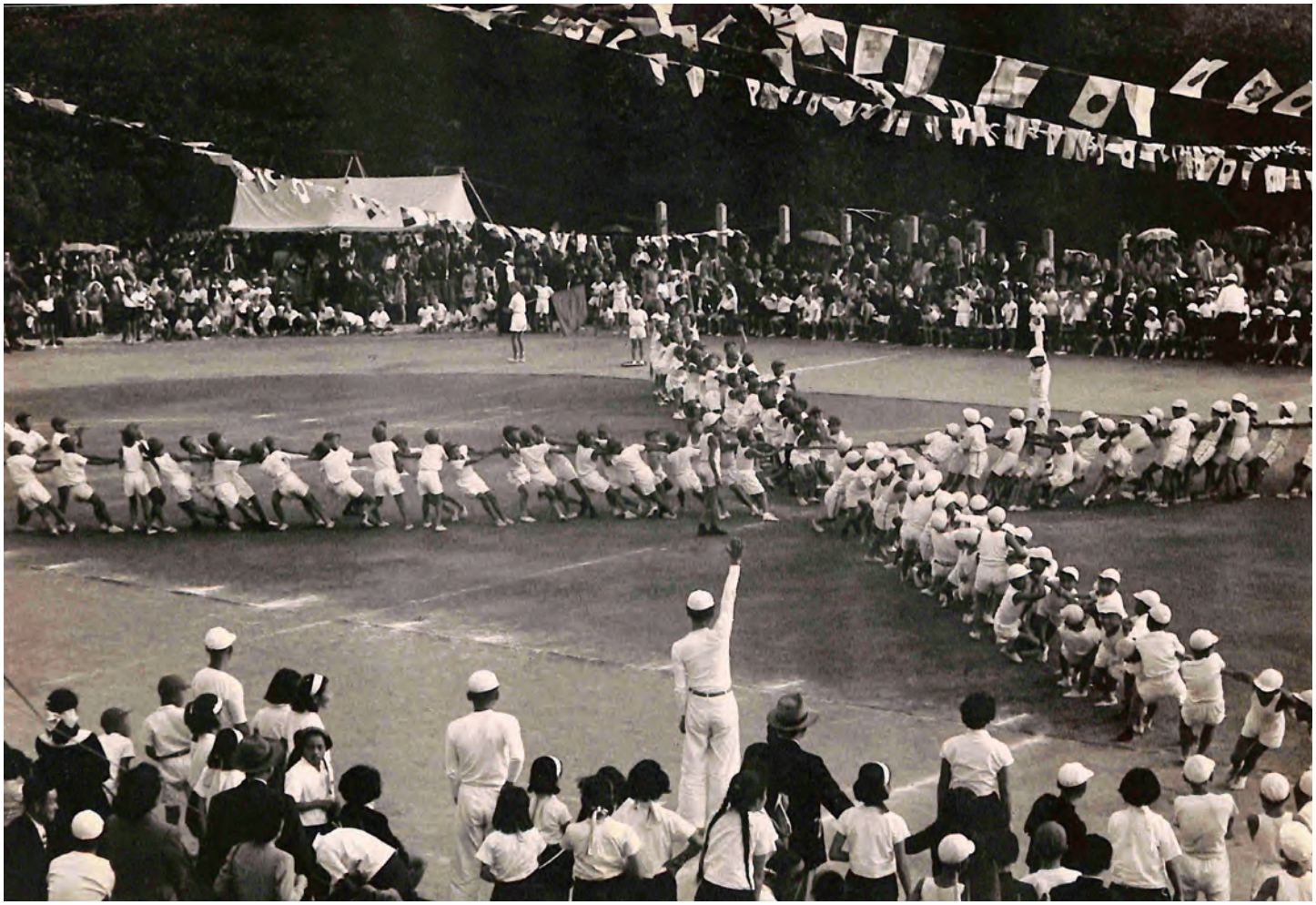
学習院アーカイブズ
ニューズレター

Gakushuin Archives Newsletter　2024.2.16　vol. 22



初等科運動会　十字綱引き　1953（昭和28）年10月18日

初等科の運動会では明治期から綱引きが始まり、昭和初期までには十字綱引きの形となり現在に至っている。この年には３、４年の男子によって行われた。（学習院初等科所蔵）

Contents

「知」に関する畏怖の念とアーカイブズ
学習院アーカイブズ 室長　島津　忠美 …… 2

学習院はなぜ目白にやってきたのか ―「ブラタモリ」余話 ―
学習院アーカイブズ　桑尾光太郎 …… 4

50年受け継がれし『教学聖訓』をたどる
学習院アーカイブズ　小根山美鈴 …… 6

主な活動（2023年2月～ 2024年1月） …… 8

2027年 学習院は創立150周年を迎えます

「知」に関する畏怖の念とアーカイブズ

学習院アーカイブズ 室長　島津　忠美

令和5年4月に学習院アーカイブズ室長に就任しました、島津です。

この原稿を執筆しているのは寒暖差の激しい12月、陽の光がとてもありがたく感じる日々です。陽の光に思いをはせますと、中等科時代、部活で引率にあたっていただいた恩師が良く晴れた空を見上げ、「あんな遠いところから光が届くんだからすごいことだなぁ」とつぶやかれ、コーチの方が「先生が“わらんべ（童）”の気持ちになられた」と笑ってらしたことを思い出します。

「知」の恩恵と畏怖の念

陽の光は地上に多くの恩恵をもたらしていますが、その源は太陽内部で起きている核融合反応にあるそうです。そこでは水素からヘリウム、さらに他の元素も生成されているようですが、鉄よりも重い物質は、超新星、中性子星がかかわることによってのみ生成されるということだそうです。それがあってこその地球であり、生命であり、・・・私たちの社会活動があるということになり、そのこと自体が奇跡的な事だと思いますが、中等科の頃は、なぜそんなことがわかってくるのか、科学というものに畏怖の念をおぼえ、そうしたことを少なくとも理解できイメージできるようになりたいと、理科への関心が芽生えたことを思い出します。

私自身、職歴として長く半導体の技術、事業にかかわって業務をしてまいりました。半導体は微細化技術によって多くの素子を小さなチップに埋め込み、大規模で複雑なアルゴリズムを精緻に実行し、大容量の情報を高速で処理するマイクロコンピュータを実現するものであり、斬新なビジネスモデルと相まって様々な電子機器に組み込まれ、社会の革新に貢献しているものですが、そうした価値を生みだす構造は、再構築が困難な膨大な「知」としての大規模複雑系システムであり、職歴を経てなおますます「知」ということに畏怖の念をいだいています。

畏怖の念とは、敬いとともに恐れを含むものですが、その恐れは、もしその体系化された「知」がなくなってしまったら、一部でもかけてしまったら、今と同じ恩恵を受けるためにどれだけの後戻りをしなければならないのか、そもそも必要となった時に後戻りできるのだろうか、という恐れです。

「知」を活用するために（学習院アーカイブズの活動）

現代社会のどのような分野でも、多くの「知」の集積と体系の上に、様々な分業と連携が機能して成り立っており、「知」が、従って人々が合理的に連携して進化しつづけることが大切なはずなのですが、今はそれを想定できない時代に入ってしまいました。

ここに自分たちとして、「知」をしっかりと保管していく必要性が認識されます。学習院は創立150年を迎えようとしていますが、今後も将来にわたり優れた人材を輩出し続けるために、過去どのように「知」を授け、後進を育て「知」の伝承を促してきたか、実践してきた教育の方法論も大切な「知」であり、体系化し引き出すことができるようにしておく必要があります。

学習院アーカイブズは「本院の経営・教育活動及びこれらの活動に伴う事務処理において作成され、収受される史資料のうち、将来に残すべき価値のある史資料を評価選別し、保存・管理する」ことが責務です。各部門で有用となる期間を経過し非現用となってもそうした目でみて有用となる可能性のある

ものは引き続き保管していく、そのため各部門から非現用となった文書の移管を受け、基準をもうけて評価選別していきます。

「基準を設けて」といっても、評価選別は、将来に、次代に、後進にむけ伝承すべき「知」を展望することがまず先にあり、その本質は、各部門がどういう考え方でどう行動してきたのか、そのどこに次代に伝えていきたい価値があると考えるのかといった、日常業務の振り返りと将来展望についての建設的なコミュニケーションにあると考えています。

課題認識

2011（平成23）年4月、法人に学習院アーカイブズができてからこれらに取り組んでおり、12年経過しました。本院の長い歴史の中で非現用となった文書は各部門に多く存在します。

各部門の活動により現用文書は増え続けますが、非現用となった文書の移管を受け評価選別しアーカイブする、そして各部門に非現用の文書がない状態に追いつくところまでが一つのマイルストーンだと思いますが、それがいつになるのか見通すことは難しいことです。

さらには情報の引き出しを容易にするためにデジタルアーカイブズシステムも検討しなければなりません。各部門の多種多様な管理体系を引き継いでシステム化することの難しさ、アクセスや複製が容易となるためセキュリティも考慮しなければならないこと、電子的な記録に対する媒体の物理的限界から現物の保管は引き続き必要であること、等々、課題は多くあります。

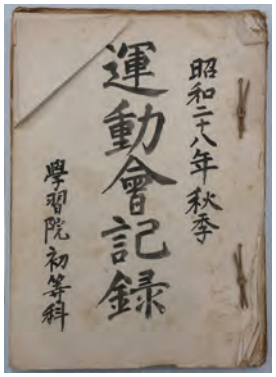
保管スペースは、現用文書が紙である以上、その実物を保管するのが原則であり、各部門で非現用の文書がない状態に追いついたとしても、現用の段階で文書がデジタル化され、デジタルで運用されている状態となって、且つ、その電子的な保管が媒体の物理的限界を解決する方法の進化、革新もにらみつつ、増強が必須です。

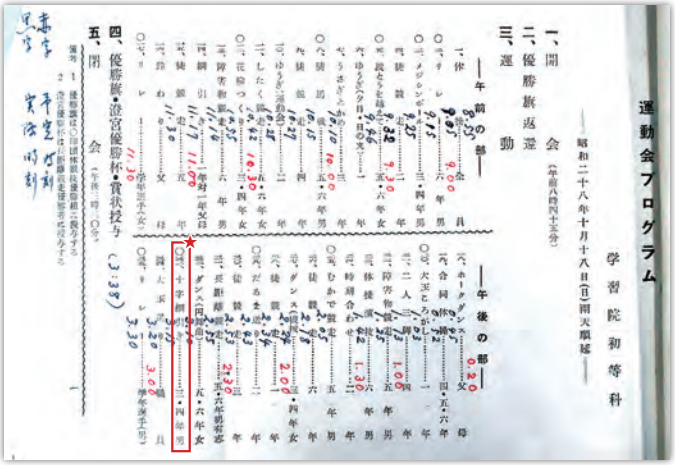
部門連係による評価選別の実施と適切な資料保存、作業と収容スペースの戦略、デジタルアーカイブシステムの導入へむけた検討、デジタルを中核とする資料の保管に関する将来像を見通していくこと、すべてを緻密に計画立てて進めることは困難であり現実的ではないとは理解していますが、一つ一つ実際面を詰めて行動し着実に進めていくことが大事だと思っています。

ご関係の皆様の高い意識とご尽力が学習院の、ひいては社会全体のより良い将来を作っていくことに敬意を表しつつ取り組んでまいります。

～初等科運動会こぼれ話 ― 表紙の写真より～

表紙の運動会写真は、学習院アーカイブズによる初等科所蔵資料の調査作業で確認された。初等科には、明治期以来の運動会の記録文書やプログラムなども残されている。「だるま運び」（だるま送り）も大正初期から現在まで続く伝統の種目である。
（資料は学習院初等科所蔵）





学習院はなぜ目白にやってきたのか
―「ブラタモリ」余話―

学習院アーカイブズ　桑尾 光太郎

2023年7月、学習院アーカイブズにNHKのディレクターから、目白をテーマに番組制作を企画しているので取材に協力してほしい旨の問い合わせがあった。ほどなくその番組は「ブラタモリ」であることがわかり、「目白」といえば学習院のイメージがあるので、学習院の歴史のなかで紹介する材料を探しているとのことだった。そこで学習院ならびに目白キャンパスの沿革を説明しながら、どのような話題が紹介できるか、ディレクターやスタッフの方々と雑談を重ねるなかで、「そもそも学習院がなぜ目白に移ってきたのかわかりますか」と問われた。しかし筆者は明確な回答を用意することができなかった。目白移転に至るまでの経緯は、『開校五十年記念 学習院史』（1928年）や『学習院百年史 第一編』（1981年）に記載され、その根拠となる資料の一部が学習院アーカイブズにも残されている。さらに『百年史』刊行後、宮内庁宮内公文書館や国立公文書館所蔵の学習院関係資料が公開されて調査収集が進められてきたが、「なぜ目白か」を示す資料には思い至らなかったからである。

1877（明治10）年に神田錦町に開業した学習院は、1886（明治19）年に校舎を焼失した後、虎の門（1888年）・四谷（1890年）と移転を重ねていた。しかし四谷校地の本館は1894（明治27）年の地震のため使用不能となり、本来寄宿舎だった建物が仮教場に代用された。同年には早くも田中光顕院長から校地移転を希望する上申書が宮内大臣宛に提出され、「本院教育百年ノ大系ヲ慮リ、通学ノ便否ニ関セスシテ専教育上適当ノ地ヲ撰フヲ主トス」として、富士山麓もしくは荏原郡大森村を移転候補地に挙げ、中等学科以上の学生について全寮制とすることを提案した。この構想は同年の日清戦争開戦のため、具体化には進まなかった。

翌1895（明治28）年、近衛篤麿院長が就任し、日清戦争が終結した後に改めて移転が検討され、中等学科3年以上を神奈川県小田原の城山に移す案が具申された。近衛院長の構想でも田中前院長の方針を踏襲して、中等学科・高等学科学生が学ぶ校地を東京市内から郊外に移して全寮制とする方針が打ち出されており、小田原が教育上有益と認識されて候補地に推奨された。しかし「学習院の地方移転については父兄の反対が多かった」（『学習院百年史』）ようで、1896（明治29）年6月に小田原案が不採用となってからは、東京市内もしくはその近隣の地に移転先を探すことになった。豊多摩郡代々木村御料地・小石川区の旧林大学頭邸（のち東京高等師範学校校地）・豊多摩郡中野村といった候補が検討された末、近衛院長は同年9月に北豊島郡高田村（目白）への移転を宮内大臣に上申した。上申は9月29日に裁可され、目白の民有地買収が進められることになった。その後もさまざまな紆余曲折を経て、目白に新校舎が完成し学習院中等学科・高等学科の移転が実現するのは、移転が決まって12年が経った1908（明治41）年8月のことである【図1】。移転を推進し自らも西隣の落合村に居を構えた近衛院長は、目白の校舎・寄宿舎を見ることなく1904（明治37）年に急逝していた。

【図１】移転まもない頃の目白構内（学習院アーカイブズ所蔵）

『開校五十年記念 学習院史』には、目白移転にあたっての近衛院長の意図が「学習院の特色として、理想なる寄宿舎を院内に設け、学生を悉く此に収容し、努めて家庭との連絡を絶ち、学習院自ら学校を以て家庭を兼ね、以て訓育を徹底せしめんと欲し、校舎建築の計画に付随し、最も重きを寄宿舎の施設に置けり」と記されている。1885（明治18）年に目白駅が開業していたとはいえ、明治前半の駅の東側一帯は畑や竹林などが広がる鄙びた地であり、学生が親元や都会の喧噪から離れた学校生活を送るには適した場所と考えられたようだ。「ブラタモリ」撮影時（2023年9月、放送は11月18日）には、ディレクターが準備してくれた明治初年の高田村の古地図パネルをもとに、全寮制を基盤とする学習院の特色ある教育を実現するためにふさわしい場所として、都会とはさほど離れていないが自然環境に恵まれた目白が選ばれたのではないか、と推測して説明した次第である。

【図２】「土地建物録」と「学習院校舎建築始末要略・補遺」

学習院アーカイブズ蔵「土地建物録　明治四十一年　高田村校舎建築ノ部」には、「学習院校舎建築始末要略」が収録され、その「補遺」【図2】として近衛院長時代に候補地の調査・選定にあたった工藤一記学習院元幹事が、「明治四十一年七月十四日自宅ニ於テ為シタル談話ノ要概」が記載されている。その中で、「移転ノ位置ヲ北豊島郡高田村ニ選定スルノ前ニ於テ」、小石川の「今ノ東京高等師範学校ノ所在地」（現文京区大塚三丁目）について「屢々同地ニ出張シテ種々取調ヲ為シタルニ（略）要スルニ理想ニ合セサルノ土地ナルヲ以テ之ヲ放棄シタリ」。次いで「百方穿鑿ノ末大久保ト中野停車場トノ間ニ適当ノ地区アルヲ知リ乃実地ニ就キテ調査シタルニ、其ノ地勢較々理想ニ合スルヲ以テ畧々此ニ決定セントスル迄ニ至リシ処、一ノ故障アリテ遂ニ之ヲ選取スルヲ得」ることができなかった、という。その「故障」とは近辺の陸軍戸山学校の射撃場から弾丸が飛来する危険があることで、工藤幹事は当時の陸軍戸山学校の安藤貞実校長と「青年時代ヨリノ校友ナレハ氏ニ面会シ」たところ、安藤校長から次のような助言を受けた。

氏言ヘラク該射的場ハ逸レ丸ノ防御十分ニ為シアルモノシテ此ノ上手当ノ施シ方ナシ。自分ノ思惟スル所ニテハ学習院ノ移転地ハ彼ノ地ニ求ムルヨリ北豊島郡高田村辺ニハ一層良好ナル地区アルカ如シ。行軍ノ際屢々目睹スル所ナリ、一応該地ヲ調査シテハ如何ト。是ニ於テ大久保中野間ノ土地ハ之ヲ断念シ其ノ後屢々高田村ニ出張シテ踏査ヲ遂ケ、近衛院長モ実地ヲ検分セラレ愈々此ニ選定スルコトニ決定シタルナリ。此ノ事ハ文書ニ残レルモノナカルヘシト雖、高田村ヲ敷地ニ選定スルニ至リタル由来ハ此ノ如クニアリシナリ。（適宜句読点を付した）

この資料に拠るならば、学習院が目白に移転する直接のきっかけは、当時の陸軍戸山学校校長の助言にあったことになる。『開校五十年記念 学習院史』に「近衛院長は、偶然高田町の現在地域の高燥広闊なるを耳にし、親しく工藤幹事・校医等を従へて、詳かに土地の視察を遂げ、この地を以て最も適当なりと認められたと云ふ」とあるが、「偶然」耳にした情報から目白が移転地に決まったようである。この逸話を「ブラタモリ」撮影時までに知っておけば、紹介できたかもしれないと少々後悔している。

余談ながら筆者は子供の頃からタモリのファンで、タモリが出ているテレビやラジオ番組に半世紀弱親しんできた。「ブラタモリ」の問い合わせが来たことは大変光栄であるとともに、出演時にはひどく緊張して周囲に迷惑をかけてしまったが、タモリさんや野口葵衣アナウンサーはじめ撮影スタッフの方々には親切に対応していただいた。そして西田万里ディレクターの粘り強い取材には教えられることが多く、人気番組を支えるのは地道な下調べであることを思い知らされた。改めて感謝申し上げたい。

50年受け継がれし『教学聖訓』をたどる

学習院アーカイブズ　小根山 美鈴

1．学生と教職員の必携本

2023年10月、卒業生の方から、お母様とご祖母様の遺品をご寄贈いただいた。葉書サイズより一回りほど大きな帙（ちつ）に納められた二つの冊子は、2代にわたり学習院女学部及び女子学習院から配付された『教学聖訓』であった。学習院アーカイブズには他にも同様の資料が数冊あるが、いずれも装丁、内容、年代に違いがあり、男子版なるものも存在する。院内を調べ始めると、続々と所在が明らかになり、奥深さを予感させる。この資料について、現時点でわかる限りをご紹介したいと思う。

図1は、最初に編纂された明治25年（1892）年2月の『教学聖訓』である。明治21年11月に院長となった三浦梧楼は、学習院のあり方について検討し、教育体制の改革に着手した[1)]。そのうちの『教学聖訓』は、明治4年以来華族あるいは学習院に賜わった勅諭・令旨および国民一般に賜わった勅語・詔書のうち、教学に関するものを編纂し、全教職員・学生に配付された。金色の布表紙に模様があしらわれた結び綴じに、中表紙のタイトル上部の桜の院章と、厚めの洋紙に印字された序文・本文を囲う枠も、これまた金色である。落書きなど許されない荘厳な装丁である。

図1『教学聖訓』明治25年（大学図書館所蔵）

同書は学習院の教学の基準を示すものとして、教職員は就任時に、学生は入学式の日に院長から朝夕奉読するものとして手渡された[2)]。題簽（だいせん）は歴代院長によって書かれたとのことである。学習院女学部では明治44（1911）年から編纂・配付された。

残存状況を探索したところ、学習院において4機関の所蔵を確認した（表1）。同書には奥付が無いため、発行年を特定することが難しい。序文・目次・収録内容から変化があると類推できる時期で区切ると、男女版ともに不定期に数度の改訂を経ていることがわかる。男子版は明治25年から昭和15（1940）年増補分まで、女子版は明治44年から昭和17年増補分までが残されている。

表1　学習院4機関の『教学聖訓』所蔵状況

連番	内容年	大学図書館	大学史料館	女子中・高等科図書室	アーカイブズ
1	明治25年	○	○		
2	明治30年	○	○	○	
3	明治41年	○	○		
4	明治44年	◆		◆	
5	大正２年	○			
6	大正４年	○			
7	大正５年		◆	◆	
8	大正８年	◆		◆	◆
9	大正11年	○			
10	大正13年	○			
11	大正14年	○			
12	昭和元年	○	◆		
13	昭和３年	○	○		○
14	昭和４年		◆	◆	◆
15	昭和５年	○			
16	昭和10年			◆	
17	昭和12年	○	○	○	
18	昭和15年	○	○	◆	○
19	昭和17年	◆	◆	◆	◆

○＝男子版　◆＝女子版

2．男子版の特徴

学習院では、明治23（1890）年より教育勅語を授業開始時などに読ませ、暗誦させていた。明治28年1月から毎週月曜日の第一時限開始前に、担任の教官が『教学聖訓』の教育勅語を読むことに変更することにより、学生はそれを携行することが通常となった。同書は修身の教材としても使用されたようである。

年代を経るにつれ、本文ページ数が15ページ（明治25年分）から61ページ（昭和15年分）に増加する。当初は華族や華族学校、学習院に向けての勅諭・令旨が主であったが、国民一般への詔書や勅語が徐々

に増えていく。ページ数増加のためであろうか、大正11年分以後昭和12年分を除き、帙の留め具が爪ではなく扱いやすいホックに切り替わっている。このホック型は男子版のみの形である。

収録内容については、冒頭の三浦院長による学制改革を行う前段の明治22年7月10日、宮内大臣から伝達された御沙汰に従い、厳選されたと考えられる。それは、「学習院は平素から生徒の軍務に服するの志操を養成し、陸海軍学校へ進む素地をつくるように」との御沙汰書である[3]。試みに、最も文字数の多い昭和15年分の同書（大学図書館所蔵）に含まれる単語を抽出し、出現回数の多い順に大きな文字になるよう視覚化してみると[4]、この御沙汰書の意向が反映されていることが垣間見える（図2）。

図2　『教学聖訓』昭和15年　視覚的イメージ

3．女子版の特徴

こちらは、男子版と基本的に同じ形態であり、学習院女学部から女子学習院時代に配付された。教育勅語や華族一同に賜わった勅諭など、収録内容が男子版と共通するものと、「明治二十年三月十八日　皇后陛下ヨリ華族女学校ニ賜ハリタル御歌金剛石及水は器」や、「大正十二年六月十九日　皇后陛下ヨリ女子学習院ニ賜ハリタル御歌」など固有のものが含まれる。また、昭和17（1942）年分には、「昭和十六年十二月八日米国及英国ニ対スル宣戦ノ詔書」が同年6月付けで追録されており、この詔書に関する序文と本文ページの枠線が、通常は金色のところを銀色に変更されている[5]。一方、大学史料館所蔵の同年分のうち一冊は、中表紙の八重桜の院章と枠線が全てのページにおいて銀色に統一されている（図3）。

図3『教学聖訓』昭和17年（大学史料館所蔵）

銀色に変更された理由は不明だが、後者のほうが後年に配付されたものと考えるのが妥当であろうか。

そして、目を引くのが『教学聖訓』を包む手作りのふくさ（布袋）である[6]（図4）。さまざまな布地が用いられており、布に氏名が書かれたものや刺繍してあるもの、留め具に小さなガラスの瓢箪があしらわれているものなど、学生が実際に携帯していた姿が目に浮かぶ資料の形である。ちなみに、「学生心得」第3章 第17条には、「教学聖訓及通信簿は毎日持参すること。」と定められている[7]。

図4『教学聖訓』女子版全体（女子中・高等科所蔵）

4．残された資料が語りかけるもの

大学史料館所蔵『教学聖訓』（昭和17年分女子版）のご寄贈者の手紙に、「女子学習院入学時に銘々に手渡され、（袋は各自で作る）肌身離さず大事に持っている様にいわれて、夫々、必ずランドセルや鞄に入れていました。この「教学聖訓」も、私の家が空襲で焼けた時にも持って逃げました。」としたためられていた。男子版は約50年、女子版は約30年の間、学習院の教学の基準たる精神が当時の学生に浸透されただけでなく、脈々と次世代へ継承されてきた。それは残された資料があることで、より鮮やかに現代の私たちが過去の学習院に思いを馳せることができる。奥の深い『教学聖訓』。ほんの少しの紹介にとどまったが、調べたいかたは各機関へあらかじめご連絡いただければ幸いである。

1）　三浦院長の学制改革については次を参照。『学習院百年史第一編』pp.217-234。
2）「式事録」（学習院アーカイブズ所蔵）によると、大正14年4月から昭和20年まで初等科・中等科入学式式次第に配付（授与）の旨が記載されている（ただし、昭和15年以降中等科のみ）。
3）　上掲百年史p.221。同御沙汰書は男子版のみ収録されている。
4）　実行環境：python 3.11.7, mecab 0.996, wordcloud 1.9.3, unidic-kindai-bungo-v202308（mac OS）
5）　学習院女子中・高等科図書室および大学図書館所蔵。
6）　男子版にも一部ふくさが残されている（学習院アーカイブズ及び大学史料館所蔵）。
7）『女子学習院一覧　甲（大正12年）』。しかし、学習院（男子）規則類にこのような具体的な取り扱いに関する記述は見られない。

主な活動（2023年2月～ 2024年1月）

◆文書ファイルの整理・管理
①各事務部署における文書ファイル管理簿の作成・更新
②非現用文書ファイルの評価選別（21部署）
③各部署所蔵暫定保存文書ファイルの整理・収納
④文書管理に関する支援

◆学内各部署に保存されている資料の調査・整理
①初等科所蔵資料（7月・12月）
②中等科・高等科事務室事務文書概要調査（10月～）

◆所蔵資料の整理・保存
①移管文書の選別・整理・目録作成
②学内刊行物、書籍
③自動演奏ピアノの維持管理
④劣化資料に対する保存修復
初等科所蔵安倍能成額書「自重互敬」の修復・複製支援
⑤資料クリーニング

イカリ消毒（株）による資料クリーニング作業風景（北別館）

◆資料・写真のデータベース化・デジタル化
①『雑件録』（大正2年度～昭和5年度）の件名目録作成
②『大学五十年史』（上下巻）、『学習院大学の50年』のデジタル化

◆資料受入れ（受贈）
①演劇部写真資料
②生物部関係資料
③日光光徳小屋絵葉書
④岡常次作エッチング
⑤『教学聖訓』ほか学習院女学部・女子学習院資料
⑥学習院女学部卒業証書

◆講演会、教育・広報支援等
①大学史料館展覧会「学習院制服事始」（4月3日～6月3日）への協力
②文学部史学科専門科目「アーカイブズ学演習」への協力
③東洋文化研究所一般教育プロジェクト「戦時期の学習院と東アジア」への協力
④NHK「ブラタモリ　東京・目白」（11月18日放送）企画・撮影協力
⑤大学史料館（霞会館記念学習院ミュージアム）への協力

◆資料貸出し
①乃木希典院長関係資料
遺墨（教育勅語）、軍服、旅順表忠塔建設関係文書など合計9点、明治神宮ミュージアムに貸出し。乃木神社鎮座百年祭記念展「明治天皇と乃木大将～大御心をいただきて～」に出品のため。（展示期間7月15日～ 9月24日）

◆学習院アーカイブズ施設移転・収蔵庫改修工事
①北別館に事務室・閲覧室・作業室・編纂室設置
②旧事務室改修工事、新規追加什器（書棚）設置

消火器訓練を受けるアーカイブズ職員（北別館前）

学習院アーカイブズ・ニューズレター第22号
2024（令和6）年2月16日発行

編集・発行　学習院アーカイブズ
Gakushuin Archives
〒171-8588　東京都豊島区目白 1-5-1
TEL 03-5992-1285（直通）
事務室　北別館
https://www.gakushuin.ac.jp/houjin/archives/index.html